

コアシンポジウム 1

「消化管腫瘍学の最前線—臨床と基礎のブリッジング」—オミックス解析に基づいた消化管腫瘍分子腫瘍発生理論の新展開—

主司会 菅井 有 (岩手医科大学病理診断学講座)

副司会 鈴木 拓 (札幌医科大学分子生物学講座)

消化管に発生する癌の多くは前癌病変 (本邦での粘膜内癌も含む) から粘膜内癌、浸潤癌 (進行癌も含む) へと進展する多段階発癌モデルが想定され、種々の分子異常が明らかにされている。しかしながら多段階発癌モデルは大腸癌の腫瘍発生仮説では確立されたモデルとして受け入れられているが、食道、胃、十二指腸、小腸では大腸癌のような前癌病変が確定 (もしくは推定) されているにも関わらず多段階発癌モデルを用いた腫瘍発生メカニズムの構築には必ずしも成功しているとは思われない。最近ではオミックス解析により網羅的な分子異常の解析が広く行われ、TCGA (the cancer genome atlas) のような世界的なオミックス研究が成果を上げている。その結果として従来の多段階発癌仮説にも一定の変更や修正が加えられている。腫瘍発生理論の構築は腫瘍学において最重要テーマなのである。令和元年にやや混乱している消化管腫瘍発生学を整序し、各臓器の共通性と異質性を明らかにすることは消化管腫瘍の治療にも関連する知見を得ることにもつながるであろう。そのような願望も込めて本コアシンポジウムの最後のテーマとして消化管腫瘍における腫瘍発生論を選んだ。令和の年にふさわしいオミックス解析などの最近の手法を用いた消化管腫瘍発生学の新展開になるような発表を期待したい。